



芝蘭会報

第207号

発行所

一般社団法人 芝蘭会
京都大学医学部同窓会

〒606-8315

京都市左京区吉田近衛町

TEL 075-751-2713

FAX 075-752-4015

E-mail: info@shirankai.or.jp

http://www.shirankai.or.jp

主な内容

- ② 支部だより「岐阜」「京都」「三重」
校友会・KMS-FUNDだより
- ③ 若月賞を受賞して
人事異動会員訃報

新型コロナウイルスをめぐる 医学部附属病院の現況について

部署や病院の垣根を越え 臨床現場から築く オール京都の連携体制



京都大学医学部附属病院長
宮本 享

とができました。これは救急部・集中治療部・呼吸器内科・感染制御部など新型コロナウイルス感染症に直接に関係する部署の努力はもろろんのこと、感染症の波の消長に合わせて、病床配分・看護師の配置変更をフレキシブルに行うことに全面的に協力してくれた病院内すべての部署のおかげです。

1年半以上に及ぶコロナ禍において、旅行や会食等について非常に厳しい行動方針による規制を職員にお願いせざるを得なかったことには、大変申し訳なく思っております。職員の院外において感染例は少数発生しましたが、院内における2次感染やクラスターの発生が皆無であったことは、職員の高い感染予防意識と正確な感染防御のたまものであり、本当によく頑張ってくれていると感謝しています。

さらに京大病院は全国の大学病院でもトップクラスの救急応需件数である高度急性期病院でもありますので、新型コロナウイルス感染症重症例の治療と高度急性期・高難度医療を両立することが、京大病院のミッションであるという意識を職員みんなで共有してまいりました。新型コロナウイルス感染症重症例の治療には集中治療を要します。集中治療を要する高度急性期・高難度医療にはどうしても抑制がかかってしまいますが、抑制せざるを得ない状況ではあっても、なんとかやりくりして高度急性期・高難度医療を止めることはなく第5波までを乗り越えるこ

地域住民を支える 検査体制とワクチン接種

2020年当初に京都大学IPS細胞研究所の協力で京大病院に全自動PCR装置を整備することができ、1日最大1000件超のPCR検査ができる体制が整備されました。流行早期に検査体制を拡充することができたことにより、院内感染対策のみならず社会のニーズに応える研究や大規模検査にも生かすことができました。第一に、京都市や大阪府ならびに京大関連病院の皆様との共同研究においては、新型コロナウイルス検出状況のサーベイランス



COVID-19 重症例の診療

ミッションを果たすべく 全部署がひとつに

京大病院は新型コロナウイルス感染症第1波の時から京都府より人工呼吸器管理やECMOを必要とする新型コロナウイルス感染症重症例を応需する役割を求められ、その要請に対応してまいりました。その一方で、京大病院でないと治療が難しいさまざまな高難度医療があり、

や全ゲノム解析による変異株サーベイランスを通じて感染状況解明に役立てることができています。また、整備された機器を活用して、新興感染症に即応できる検査体制の確立や新たな検査法・検査試薬の開発に着手し始めております。さらには、京都府内の医療機関や教育・福祉施設、事業所等で大規模クラスターが発生した際にも、当該機関の全関係者のPCR検査を京大病院が受け持つなど、地域貢献の面からも非常に大きな力を発揮することができました。今では当然となった医師が必要と認める入院時PCR検査については第1波当初の頃は医療機関側で支弁せざるを得ませんでした。京大病院が、京都府立医科大学病院長と京大病院の私が共同記者会見を行い、これに呼応するよう多くの学会や医療団体が声を上げてくれ、その後もまもなく保険適用となりました。

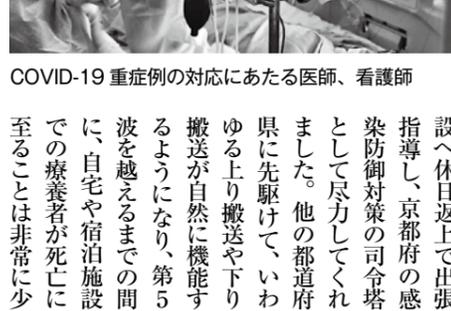


web開催された京大病院地域連携の会

2021年7月末から10月末にかけては、京都大学湊長博総長の肝いりで、京大病院は毎週土曜日と日曜日に外来棟において、京都大学の学生、教職員やその家族、そして大学コンソーシアム京都からの依頼で、他大学の学生や職員あるいはそのご家族および一般京都市民を対象として、学域ワクチン接種を行いました。1日あたり約3000人という行政の大規模接種会場の規模を上回る人数に対して、

京大病院外来棟全館を用いてほとんど混乱や待ち時間なく行われた本ワクチン接種事業については、その整然とした実施について各方面から好評をいただきました。

京大病院外來棟全館を用いてほとんど混乱や待ち時間なく行われた本ワクチン接種事業については、その整然とした実施について各方面から好評をいただきました。



COVID-19 重症例の対応にあたる医師、看護師

京大病院外來棟全館を用いてほとんど混乱や待ち時間なく行われた本ワクチン接種事業については、その整然とした実施について各方面から好評をいただきました。

支部だより

岐阜

臨床研究の あるべき姿を考える

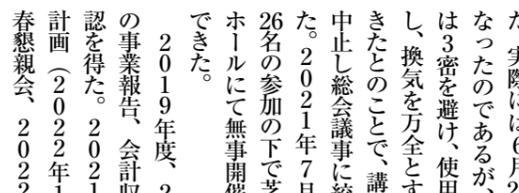
令和3年6月20日(日)、岐阜キヤッスルインにて、令和3年度芝蘭会岐阜支部総会が開催されました。今年度は新型コロナウイルス感染症拡大の状況を考慮して、オンラインでの開催となりました。はじめに支部長である清水克時先生より挨拶があった後、常任理事の富田栄一先生の進行のもとで京都大学大学院医学研究科に関する報告がありました。新任教授の紹介や本庶佑教授のノーベル生理学・医学賞受賞を記念した記念碑の設置などの報告でした。また、新型コロナウイルスの影響で京都大学医学部附属病院内科の患者が減少しているため、KMSIFUNDによる対策が行われているということでした。

次に、富田先生の進行のもとで学術講演が行われました。講演は京都大学大学院医学研究科循環器内科学教授でいらつしやる木村剛先生による「臨床研究のあるべき姿」についてのお話でした。富田先生は始めに、臨床研究の重要性や研究と日常の診療の関係性についてお話くださいました。その中でも、研究の最大のポイントは仮説形成であること、診療の中で問題点やUnmet Needを見つけられることが臨床医の最大の武器である

という点を強調されました。また、問題の発見→無作為化試験→結果を診療に反映→観察研究という臨床研究の一連のサイクルについて具体的に説明されていました。次に、富田先生が取り組まれている、冠動脈ステント留置後の抗血小板療法に関する研究についてお話くださいました。まず、薬剤ステントが登場した際、抗血小板薬の2剤併用期間を延ばす勧告があったこと、富田先生はその勧告内容に疑問を覚えて研究を始めたこと、を説明してくださいました。時代に逆行するような斬新な内容でしたが、血栓症・心臓死を減少させることに成功したことを、グラフを用いて分かりやすく説明してくださいました。ガイドラインでは1年とされていた2剤併用期間は、1か月にまで短縮できたそうです。また、その後にも説明してくださいました。現在もコロナ禍の中ではありますが、多くの病院の協力を得て研究は継続されているそうです。

最後に、今後のあるべき循環器診療についてお話くださいました。患者や社会へ説明していくこと、診療をより良くしていくことの重要性を強調されています。講演全体を通して、とてもかみ砕いた説明をしてくださいました。私たち学生にとっても理解しやすく興味深いお話でした。今回はオンラインでの開催という点で、総会は講演会の前に行われ、例年総会後に写真撮影や懇親会などは省略という点になりました。いち早く新型コロナウイルスの感染が終息し、以前のように開催できることを願うばかりです。最後にはありがとうございました。このよ

うな会にお招きくださったことへの感謝の意をもって岐阜支部の報告を終わらせていただきます。(文責・4回生 楠本修司 3回生 大島輝)



新支部長 森 洋一氏 (左)

京都

COVID-19に 翻弄された支部報告

芝蘭会には全国的に展開する支部が43存在する。海外支部の存在は寡聞にして知らない。京都支部はその中であつて正にお膝下の支部である。大学教職員を会員として含めた支部であり、1400名の会員数を数える。支部の規約上の目的は「大学内外の会員相互の親睦と連携により、医学の研鑽と地域医療への貢献を通じ、母校の発展を目指すこと」を目的とする。定例の活動として毎年7月第1日曜日に総会、講演会、懇親会を開催する。お正月第2日曜日に新春懇親会として、講演会、懇親会を開催する。京都大学医学部附属病院主催の臨床懇話会、昨年より府医師会との共催で「地域連携の集い」への参加、協力を進めている。年次総会に向けての理事会を6月に開催する。これが芝蘭会京都支部の活動のあらましである。

前回の芝蘭会報への報告は2019年10月号への報告である。今回の報告は2年ぶりとなる。2019年7月総会33名出席、講演会を「人口減少時代の都市とその生活の質」と称して京都大学地球環境学部の諸富

徹教授の講演を頂いた。前回報告したとおりである。2019年12月8日に中国武漢で発生した新型コロナウイルス感染症が世界に向けて発信されたのが2019年12月31日だった。我が国でも水際対策が打ち出されたが、1月15日に武漢市滞在歴のある患者が第1号として発生した。2020年1月30日にWHOが公衆衛生上の緊急事態と宣言した。このような情勢の中で、2020年1月12日芝蘭会館にて新春懇親会が開催された。「持続可能な社会の構築に向けて」レジュエンスをキーワードに「演題で元京都市副市長、レジュエント・シテイ京都市統括監、京都市国際交流会館館長 藤田裕之氏に講演を頂いた。ロックフェラー財団の選んだ世界100都市の持続可能な都市戦略の共有を目指す活動の一環として京都市のCRO(チーフ・レジリエンス・オフィサー)としての活動を、ハード、ソフト、自然などの多面的なレジリエンス(柔軟性、復元力、強靭さ、自己治癒力)について語っていただき、特に元教育者らしく、人、特に子供のレジリエンスの育成につき、IT、スマートフォン、VR等昨今の社会環境につき、下りのエスカレーターを上がるような努力が必要かもしれないというのが印象に残った。

2020年3月11日新型コロナウイルス感染症をWHOはパンデミックであると宣言した。武漢からの帰国者、クルーズ船の寄港による感染者の増大、都市部でのクラスター発生で患者の増加、2020年4月7日緊急事態宣言、4月16日には全国に向けて緊急事態宣言が発表された。5月14日一部を除いて解除。5月21日一部、25日には全面解除された。3密を避け、ソーシャル・ディスタンスをとり、集会、会食の自粛が求められる中で、2020年7月5日予定の総会実施は断念せざるをえなかった。2020年12月には第3波の襲来で、2021年1月7日第2次緊急事態宣言が発出され、3月2日に解除された。これにより、正月の新春懇親会も中止のやむなきに至った。2021年度総会は2021年4月25日発出の第3次緊急事態宣言の下で開催が危ぶまれたが予定5月11日までこのこと、開催に踏み切ることとした。実際には6月21日に解除となったのであるが、芝蘭会館では3密を避け、使用座席を指定し、換気を万全とする体制もできたとのことで、講演、懇親会を中止し総会議事に絞ることとした。2021年7月4日、会員26名の参加の下で芝蘭会館稲盛ホールにて無事開催することができた。

2019年度、2020年度の事業報告、会計収支報告の承認を得た。2021年度の事業計画(2022年1月9日の新春懇親会、2022年7月3日

令和3年度 芝蘭会京都支部 役員

顧問	西 祥太郎 (S31)		
支部長	森 洋一 (S47)		
副支部長	森本泰介 (S52)	野口雅滋 (S53)	妹尾 浩 (H2)
会計監事	齋藤信雄 (S43)	松田捷彦 (S44)	
理事	加藤静允 (S36)	鎌野孝和 (S38)	肥後昌五郎 (S38)
	小泉欣也 (S43)	小林展章 (S43)	馬場満男 (S44)
	中谷壽男 (S48)	中村保幸 (S49)	東 義人 (S49)
	吉田 章 (S49)	竹内俊史 (S54)	横出正之 (S54)
	福岡正恒 (S55)	猪飼伊和夫 (S56)	三木真司 (S59)
	若園吉裕 (S60)	古家敬三 (S61)	鍵本伸二 (S62)
	松村由美 (H6)		

計26名 ()内は卒年

三重

病態検査学から 感染症を読み解く

令和3年7月4日(日)、オンライン会議サービスZoomにて、令和3年度芝蘭会三重支部総会が開催されました。

司会は新たに会長に就任した三重大学の井上貴博先生が務められました。会員数の報告、退会者、入会者などの報告があり、続いて、規約改定、人事承認、会計報告がありました。コロナ禍ということでオンラインにて開催され、移動の煩わしさや感染のリスクなどがないというメリットもありますが、やはり対面で話すのとはワケが違い、意思疎通という大きな面においてデメリットがあるように感じました。しかし、その中でも工夫を凝らすべきであるということ、コロナ禍により総会に参加できていない先生方の近況報告を芝蘭会報に載せてはどうかという意見も出ました。コロナ禍前に私が参加させていただいた総会では、最後に懇親会がありました。今年度はもちろん開催されずとも残念でした。誰もが願っていることだとは思いますが、ほんとうに収束が待ち遠しいです。

続いて京都大学大学院医学研究科臨床病態検査学教授長尾美紀先生より、医学部の現況報告と、「病原体のゲノム解析を通じて読み解く感染症の疫学」と題して講演がありました。大きく分けて2つのテーマについてお話されました。まずは、院内感染対策の一環としての疫学解析—薬剤耐性菌に関する発生現場の調査など薬剤耐性菌アウトブレイク対策の基本から、実際の2004年および2012年の京都大学医学部附属病院における多剤耐性緑膿菌のアウトブレイク時の対応などを説明されました。

続いて病原体のゲノム解析へと話は移りました。薬剤耐性菌において分子疫学解析は、薬剤耐性菌/薬剤耐性遺伝子の広がりを明らかにするという空間的意義、薬剤耐性菌等が生み出される経路を明らかにするという時間的意義があるとおっしゃっ

京都大学医学部 校友会・教育研究支援基金

(KMSIFUND) だより

T606-8501
京都市左京区吉田近衛町
京都大学医学部研究科事務部
総務企画課企画広報掛
TEL 075-753-4695
075-753-4322
FAX 075-752-1528
Mail-Address:
kyoto-kms-fund@office.
med.kyoto-u.ac.jp

老化研究の最近の進歩

第14回校友会総会・講演会



KMSIFUND
委員長(2019年)
耳鼻咽喉科・頭頸
部外科学 教授
大森孝一

令和3年9月25日(土)に、医学部芝蘭会館盛盛ホール・山内ホールにおきまして、京都大学医学部校友会第14回総会・講演会がオンライン開催されました。



左 芝蘭会館に集まった
登壇者と関係者
右 鍋島陽一先生

総会の部におきましては、新屋明美校友会会長のご挨拶、ならびに岩井一宏医学研究科長・医学部長からのご挨拶がございました。その後、京都大学医学部若手研究者優秀論文賞(KMYIA)の表彰式の様子、録画で配信されました。KMYIAは、京都大学医学部教育研究支援基金(KMSIFUND)の支援事業として京都大学医学部に所属する大学院生、研究生等を対象とした表彰制度「京都大学医学部表彰制度」の一つとして平成21年に設けられたもので、学部学生、大学院生、研究生、研修員等非常勤員を筆頭とする優秀論文を選考し表彰するものです。今回は、選考委員会での厳正な審査の結果、臨床研究部門から、血液・腫瘍内科学分野越智陽太郎氏、呼吸器内科学分野辻貴宏氏の合計2名(所属は論文掲載時のものです)が選ばれ、岩井医学研究科長・医学部長より、表彰



状と副賞の目録(20万円)が授与されました。続いて、今年度は京都大学医学部校友会賞の募集がコロナ禍で中止であったため、校友会生活・課外活動委員会副委員長天野証子氏より、校友会賞の紹介があり、校友会賞は、目標を高く持ち、部活動に真摯に取り組む学部公認団体を応援・支援することを目的としており、コロナ禍が収束すれば募集を再開するため、奮って応募してほしい旨の説明がされました。

引き続き開催されました講演会の部は、例年どおり、京都大学医学部研究科の教授2名による担当研究領域に関する講演と、その後の特別講演の構成で行われました。学内の基礎研究領域からは、脳統合イメージング花川隆教授に、「脳と心臓」について、ご自身の研究内容を盛り込みつつ、わかりやすい講演をいただきました。また、臨床医学領域からは、心臓血管外科学谷謙司教授が「大動脈疾患との闘い」について講演され、命を預かる外科の進歩を見せていただきました。

本年の特別講演は、(公益財団法人)神戸医療産業都市推進機構 先端医療研究センター長 鍋島陽一先生に「老化研究の最近の進歩」についてお話しいただきました。ご講演では、はじめに老化研究の歩みと全世界の状況について概観され、老化と関わるカロリー制限、IGF1、Sirtuin遺伝子、メトホルミン、オートファジーについて解説いただきました。つぎに、ご自身が開発された老化マウスKlothoに関する最近の研究の進展について、カルシウム制御や脂質代謝について詳細にご説明いただき、ビタミンDの投与によっておこる代

謝の変容と絶食によっておこる代謝の変容とがそっくりであることをお話されました。最後に、これまでの鍋島先生の研究成果のまとめとして、ご自身が老化マウスを発見されたときから、分子機構や代謝の問題等までを一枚のスライドに集約して示されました。それぞれのデータ間には大きな矛盾がないという点で、老化がプログラム化された過程として捉えられ、老化研究として体系的に捉えらるるに至ったことを自らの研究活動で体現されました。結びにあり、イギリスの動物学者であるデイズモンド・モリスの著書「The Book of Age」の紹介があり、「この本には、0歳から100歳までの事が全部書いてあり、70歳のところには、カーン・ユングの『人間はその種によつて長命が意味を持たないとしたら、おそらく70歳まで生きはしないだろう。人生の午後は、単に人生の朝の哀れな付け足しではないだろう。』という言葉が紹介されています。私は、このユングの言葉に勇気づけられて、もう少し研究したいと思っています。」と今後の抱負を述べられました。

このように、第14回医学部校友会総会・講演会は、オンライン開催での新たな試みで、現役学生を含む100名を超える参加を得て、大変充実した内容で終了することができました。企画・運営に当たられた校友会の皆様方、ご参加いただいた皆様方に心より感謝申し上げます。また、芝蘭会の皆様方の引き続きのご支援をお願いいたします。

この度は京都大学医学部若手研究者優秀論文賞KMYIAを受賞させて頂き、大変光栄に存じます。血液・腫瘍内科学の高折見史先生、腫瘍生物学の小川誠司先生をはじめ、日頃よりご指導を賜っております先生方、皆様にご場を借りて感謝申し上げます。

今年受賞対象となった論文は、「コヒーシオンおよびRUNX1欠失によるクロマチンループ破壊および骨髄異形成症候群発症」です。白血球の発症には遺伝子変異が重要な働きをします。近年の次世代シーケンサーによるゲノム解析により、白血病の主要な遺伝子変異標的の一つとして、新たにコヒーシオン複合体が同定されました。しかし、コヒーシオン変異がどのように造血細胞の機能を障害し、造血器腫瘍を引き起こすかについては詳しく分かっていませんでした。私たちは、3000症例もの大規模メタデータをを用いたゲノム解析や、コヒーシオン遺伝子ノックアウトマウスの造血系システム解析、次世代シーケンサーを用いたHi-Cなどの最新のエピゲノム解析手法を統合的に駆使することで、コヒーシオン変異が白血球を引き起こす分子機構の解明という課題に挑戦しました。その結果、白血球症例でコヒーシオンSTAAG2変異とRUNX1変異が非常に高頻度に共存することや、マウスにおいてSeg2とRunx1遺伝子が両方ともノックアウトされると致死的な骨髄異形成症候群を発症すること、その分子機構として、コヒーシオンSTAAG2が転写因子RUNX1と協調的にエンハンサー・プロモーター間の高次ループ形成を制御しており、遺伝子変異によりその繊細な制御が破綻すること、などを新たに明らかにしました。以上の研究成果は、コヒーシオン変異を有する白血球の分子機構解明に資す

とにも、エピゲノムを標的とした新薬による新規治療法の可能性を開くこととなりました。本研究では、マウスの造血機能解析やゲノム編集、免疫蛍光染色、バイオインフォマティクス解析などの多彩な実験・解析手法が必要となったため、学内外のたくさんの方々のお力添えを頂き、なんとか実現することができました。この受賞を励みに、今後とも医学・生物学の発展に貢献できるように、そして京都大学らしい独自の研究を推進していけるように、精進してまいります。末筆ではございますが、教育研究支援基金に御寄附頂きました方々に感謝しますとともに、今後の校友会のますますのご発展を心より祈念いたします。誠にありがとうございました。

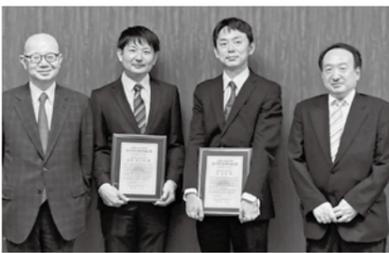
この度は令和2年度京都大学医学部若手研究者優秀論文賞(KMYIA)を頂き大変光栄に存じます。私は京都大学を卒業後、臨床に6年従事したのち博士課程(呼吸器内科学)に進学し、患者さんの癌細胞の培養と解析系の構築に取り組み、学位を取得しました。その研究を継続・展開し、本成果を得ることができました。素晴らしい研究環境とご指導をいただいた平井豊博教授、教室員のみならず深く御礼申し上げます。

さて、近年肺癌分野では、ドライバー遺伝子変異という発癌の重要な治療薬の開発によって目覚ましい治療効果の改善がもたらされました。本研究の対象であるALK融合遺伝子もドライバー遺伝子変異の一つで、その標的

薬アレクチニブを投与すると腫瘍が画像上捉えられないほど小さくなります。一方で癌細胞の根絶はできず、いずれ腫瘍が薬剤耐性を獲得したうえで病勢進行することが問題となっていました。本研究では薬剤耐性後ではなく、治療への癌の初期反応に注目しました。患者さんの癌細胞のアレクチニブへの初期反応を、網羅的発現解析を通じたシグナルパトウェイの変化を捉えることで明らかにし、癌細胞の一部が分子標的治療から逃れ根絶を免れる機構を探りました。結果、癌細胞はアレクチニブ治療に曝露されるとYAP1活性が高まり、YAP1が核内移行することで転写コファクターとして働き、抗アポトーシス因子が発現亢進して癌細胞が生存を維持することを示しました。

例えば臨床における細菌感染症の治療では、耐性菌を作らない多剤療法の方針が優位であり、この薬が効かなくなったら次の薬へ、という「いたちごっこ」は治療の本流ではありません。分子標的薬が高い抗腫瘍効果を発揮するようになった現在では、癌治療においても「耐性が生じてからは遅い」のでは、という疑問を持つことがこの研究の出発点であり、初期の反応に注目した理由です。本研究によって、治療初期からの多剤療法が癌の根治を目指した薬剤療法になりうることを、ALK阻害剤とYAP1阻害剤の治療初期からの併用療法がその一つかもしれないことなど、臨床に重要な示唆をもたらす成果が得られました。

氏名	現所属	論文投稿時の身分	論文題目	掲載誌
越智陽太郎	医学研究科 次世代腫瘍分子創薬講座 特定助教	博士課程 医学専攻 血液・腫瘍内科学分野 4回生	Combined Cohesin-RUNX1 Deficiency Synergistically Perturbs Chromatin Looping and Causes Myelodysplastic Syndromes	Cancer Discovery
辻貴宏	医学研究科 呼吸器内科学分野 客員研究員 (名古屋大学医学系研究科 分子細胞学 国内留学中)	医学研究科 呼吸器内科学分野 医員	YAP1 mediates survival of ALK-rearranged lung cancer cells treated with alectinib via pro-apoptotic protein regulation	Nature Communications



左から、岩井研究科長、越智さん、辻さん、大森委員長

末筆となりましたが、栄えある本賞をいただいたことを励みに、さらなる挑戦を続けてまいります。教育研究支援基金にご寄附いただいた皆様方に心より感謝いたしますとともに、校友会諸氏のますますのご発展を祈念いたします。

若手研究者優秀論文賞KMYIA受賞者の言葉

兄弟の背中を追い 若者にエールをつなぐ 若月賞を受賞して

昭和43年9月卒業
邊見公雄



去る7月9日、長野県佐久市での「第60回農村医学夏季大学講座」に参加して若月賞をいただいた。私の知る限りでは芝蘭会員では3人目かと。1人目は野の花診療所を開設し在宅ホスピスを牽引している徳永進学兄(昭和49年卒)である。2人目は静岡県島田市で地域医療を実践し母国アフガニスタンにも貢献しているレシャード・カレット先生(昭和51年卒)である。

若月賞は、長野県の佐久平で医療のみならず予防や福祉など病院を中心にプレホスピタルケアの生活習慣を改善し、日野原重明先生の長年の提言で改名した生活習慣病(私の学生時代は成人病)を予防、退院後の社会復帰のためのリハビリテーション、食育や体育(農民体操で農夫症と言われた腰痛防止)など全人的医療をも生涯に亘り実践された若月俊一先生の業績を顕彰するものである。また先生は、専門医志向の強い若手医師を総合診療に導くとともに多くの研修医を受け入れて一人前に育てられ、佐久総合病院を研修医、総合診療医、地域医療のメッカに創りあげられた。

私は赤穂市民病院時代、研修医や指導医に「東の佐久、西の沖繩中部を目指そう」と号令をかけていた。どれほど届いたかは検証できていないが……。また過去には川島みどり氏、早川一光氏、中村哲氏など著名な方々も受賞されている。こんな名譽ある賞を私が受賞してもいいものか、少しだけ躊躇があった。しかし字田舎、大字と田舎で育ち医者生活の殆どを地方で過ごした者の代表としてなら相応しいとも考え、また地域で頑張る方達へのエールにもなるかと受賞することとした。私は赤穂で院長になった時、国立姫路

病院(現姫路医療センター)と倉敷中央病院を兄弟と思い、少しでもその背中に追いつき近付こうと考え22年間の院長生活を送った。地域医療の目標は若月俊一先生と諸橋芳夫先生である。幸いなことに諸橋先生には全国自治体病院協議会で、若月先生には農村医学会や日本人間ドック学会などで薫陶をいただいた。

また、芝蘭会の先輩方には医学以外のことも含めて多くの教えをいただいた。中でも地方病院の院長としてお世話になったのは菊池晴彦医学部長、吉田修病院長(いずれも当時)のお二方である。失礼ながら阪神タイガースに例えるならば江夏、田淵の黄金バッテリーそのものであった。トップとしての物の考え方など沢山のことを学ばせていただいた。芝蘭会の若い会員達も是非、目指す目標のテーマや人物を決めて生涯現役を貫いていただきたいと老翁心ながら願っているところである。

追記 佐久滞在中の3日間は梅雨空。帰路の佐久平駅で乗車間際にやっと浅間山頂が顔を見せてくれた。

追々記 この地域で医療人を育て、東京流出による人口減防止を掲げて佐久大学の理事長をしている同級生の盛岡正博君に大学を案内していただいた。コロナ禍にあつてもワークショップで熱心に学ぶ若者達の姿を見せていただき、生涯現役を改めて決意した。



授賞式にて

R3.6.1	峰晴 陽平	採用	脳神経外科助教 → 人間健康科学系専攻健康医療 AI 講座特定准教授
R3.6.1	小島 諒介	採用	人間健康科学系専攻先端看護科学コース 先端基盤看護科学講座特定講師 → 人間健康科学系専攻近未来システム・技術創造部門講師
R3.8.1	木村 亮	昇任	形態形成機構学助教 → 同講師
R3.8.1	濱西 潤三	昇任	総合周産期母子医療センター講師 → 婦人科学・産科学准教授
R3.8.1	佐藤 篤靖	昇任	呼吸器内科学助教 → 同講師
R3.8.1	下戸 学	昇任	初期診療・救急医学助教 → 同講師
R3.8.1	肥田 侯矢	昇任	総合臨床教育・研修センター助教 → 消化管外科講師

R3.8.1	最上 晴太	昇任	産科婦人科助教 → 総合周産期母子医療センター講師
R3.9.1	有蘭 美沙	採用	フランス国立保健医学研究所研究員 → システム神経薬理学特定講師
R3.9.2	JORMAKKA, Mika Kristian	採用	Centenary Institute/ University of Sydney Associate Professor → 分子細胞情報学特定准教授
R3.9.30	福田 和彦	辞任	麻酔科学教授 → 社会福祉法人恩賜財団大阪府済生会野江病院院長補佐
R3.10.1	大塚 教雄	採用	国立研究開発法人理化学研究所生命機能科学研究センター研究員 → 先端看護科学コース先端基盤看護科学講座特定准教授
R3.10.1	野村 尚史	採用	皮膚科特定准教授 → 難病創薬産学共同研究講座(産学共同) 特定准教授

人事異動

謹んでご冥福をお祈りいたします

日付はご逝去日

花咲 博	昭和 19 年卒	令和 2 年 9 月 24 日	赤沢 修	昭和 30 年業卒	平成 26 年	二木 隆	昭和 40 年卒	令和 3 年 10 月 10 日
渡部 良次	昭和 23 年卒	令和 3 年 8 月 10 日	渡邊 幹雄	昭和 31 年卒	令和 3 年 3 月 2 日	中村 仁一	昭和 41 年卒	令和 3 年 6 月 5 日
高橋 浩	昭和 24 年卒	令和 3 年 6 月 4 日	阿部 弘毅	昭和 32 年卒	令和 3 年 9 月 24 日	大西 慧	昭和 42 年卒	令和 3 年 9 月 26 日
山内 皓	昭和 24 年卒	令和 3 年 7 月 23 日	植田 謙次郎	昭和 32 年卒	令和 3 年 8 月 5 日	奥野 武彦	昭和 43 年卒	令和 3 年 7 月 26 日
伊藤 智章	昭和 24 年専卒	令和 3 年 7 月 25 日	岡本 美恵子	昭和 33 年卒	令和 2 年 8 月 22 日	織野 彬雄	昭和 44 年卒	令和 3 年 8 月 15 日
野崎 健造	昭和 24 年専卒	令和 3 年 2 月 28 日	中野 賢二	昭和 33 年業卒	平成 27 年 4 月 28 日	添田 世沢	教室会員 病理、外科	令和 3 年 1 月 29 日
落野 正	昭和 28 年卒	令和 3 年 7 月 14 日	坂本 正彰	昭和 35 年卒	令和 3 年 1 月 4 日	岡田 等	教室会員 耳鼻科	令和 3 年 6 月 28 日
金谷 光雄	昭和 28 年業卒	令和 3 年 6 月 27 日	大原 道郎	昭和 38 年卒	令和 3 年 1 月 10 日	二宮 和子	教室会員 麻酔科	令和 3 年 5 月 15 日
高月 清	昭和 29 年卒	令和 3 年 5 月 23 日	原田 卓	昭和 38 年卒	令和 2 年 9 月 29 日			
藤田 昭夫	昭和 29 年業卒	令和 3 年 5 月 2 日	上田 國寛	昭和 40 年卒	令和 3 年 9 月 5 日			

会員訃報

原稿募集

事務局から
平成17年4月からの「個人情報保護法」の全面施行により、個人情報取り扱いに厳しい制約が課せられました。つきましては、会員の連絡先等のお問い合わせは、必要理由等を明記の上、郵便またはFAXにより事務局までご送付ください。電話でのお問い合わせにはお答え致しかねますので、ご了承ください。
FAX 075-752-4015

芝蘭会報は、会員の皆様の情報交換・意見発表の場であり、支店活動、クラス会、会員の著書の紹介(自薦・他薦)及び医学・医療等に関するご意見等を寄稿ください。なお、送付先は FAX(075-752-4015) または E-mail (info@shirankai.or.jp) でお願致します。また、原稿の採用及び掲載時期については、編集委員会が決めています。ご了承ください。

芝蘭会報編集委員会

芝蘭会報編集委員会
委員長 高折見史
委員 中村保幸、吉岡秀幸、清川岳彦、園部誠、松村由美、甲斐亜沙子、諫田淳也
芝蘭会報誌部
顧問 高折見史
部員
(6回生) 谷本将崇、小野謙騎、西垣利彦
(5回生) 岡和来、西村健太、秋宗俊久、原明弘、森田瑛、吉村太貴、樺井良太郎、濱田草太
(4回生) 奥野芳樹、青木ちひろ、福井真孝、楠本修司
(3回生) 三宅大河、小林空暉、小澤同陽、野洲春菜
(2回生) 大島輝

芝蘭会事務局
事務局長 山田均
総務課長 秋山和美
管理課長 森勝二

制作協力 京都通信社
デザイン 納富進